

## 変わるもの、変わらないもの

千葉大学大学院園芸学研究科 花卉園芸学研究室所属 博士前期課程 2年

西岡 恵理 華

私が花卉園芸学研究室に所属したのは2007年秋。花卉研＝ペチュニアであり、圃場にある13棟の温室はどれもペチュニアで埋め尽くされていました。しかしそれから3年。安藤教授の退官を2年後に控え、その図式は大きく変化しています。

現在の花卉研では、ペチュニアはいくつもある研究対象の一つです。他にもサクラ、カツラ、ハナシノブ科のフロックス、シソ科のヘスペロジギス、キク科のオステオスペルマム、クマツヅラ科のダンギク、そしてシバといった様々な植物を扱うようになっていきます。ペチュニア以外の植物が本格的に導入され始めたのは私の代です。私自身はペチュニアで研究をしていたのですが、同期6人のうち3人が違う植物を扱っていました。けれども現在の学部4年生の代では皆違う植物を扱うことが普通となり、それぞれが独立して頑張っています。

そんな移りゆく環境の中で、私にとって最も衝撃的だった出来事は、原種ハウスのペチュニアを一掃したことでした。

原種ハウス・・・いつからそう呼ぶようになったのか私には分かりませんが、ここでは南米で採ってきたペチュニアを栽培していました。南米フローラ調査の歴史が詰まったハウスです。南米フローラ調査は私が生まれる前から始まっており、今や花卉研の名物というべきものでした。南米調査に行きたい!! という思

いを胸に花卉研に入った学生も多かったのではないのでしょうか。けれど南米調査も、2008年、20回目を迎えるとともに終了となりました。私は調査に参加させていただいた最後の学生です。そして、今年原種ハウスのペチュニア廃棄に至り、南米を夢見て原種ハウスのペチュニアを眺める—そんな学生も、場所も、完全に過去のものとなってしまいました。ひとつの時代が終わろうとしている・・・そうしみじみ感じさせられました。

しかし、花卉研として変わらないものもあります。それはどんな植物を扱おうとも、「研究は栽培ありき」であることです。学生は一人で温室一棟を管理し、水やり、種播き、薬剤散布などの植物管理から、土づくり、草刈り、温室の修理など栽培にかかわるすべてのことを自分たちで行っています。現在は花卉研に在籍している学生が9名と例年になく少ないため、圃場の除草や環境整備など広範囲にわたる作業では個人の仕事量が多く大変です。しかし、皆汗や草にまみれながら熱心に取り組んでいます。また研究以外にも、お花見や花火大会はもちろん、時には肉が食べたい! というだけでバーベキューをし、誕生日にはケーキで祝うなど皆で楽しく学生生活を満喫しています。

そしてこれからも、植物を育て、汗にまみれ、日焼けで真っ黒になる花卉研的的日常は変わらず受け継いでいきたいものです。



作業棟での集合写真（最後列左から2目が著者）